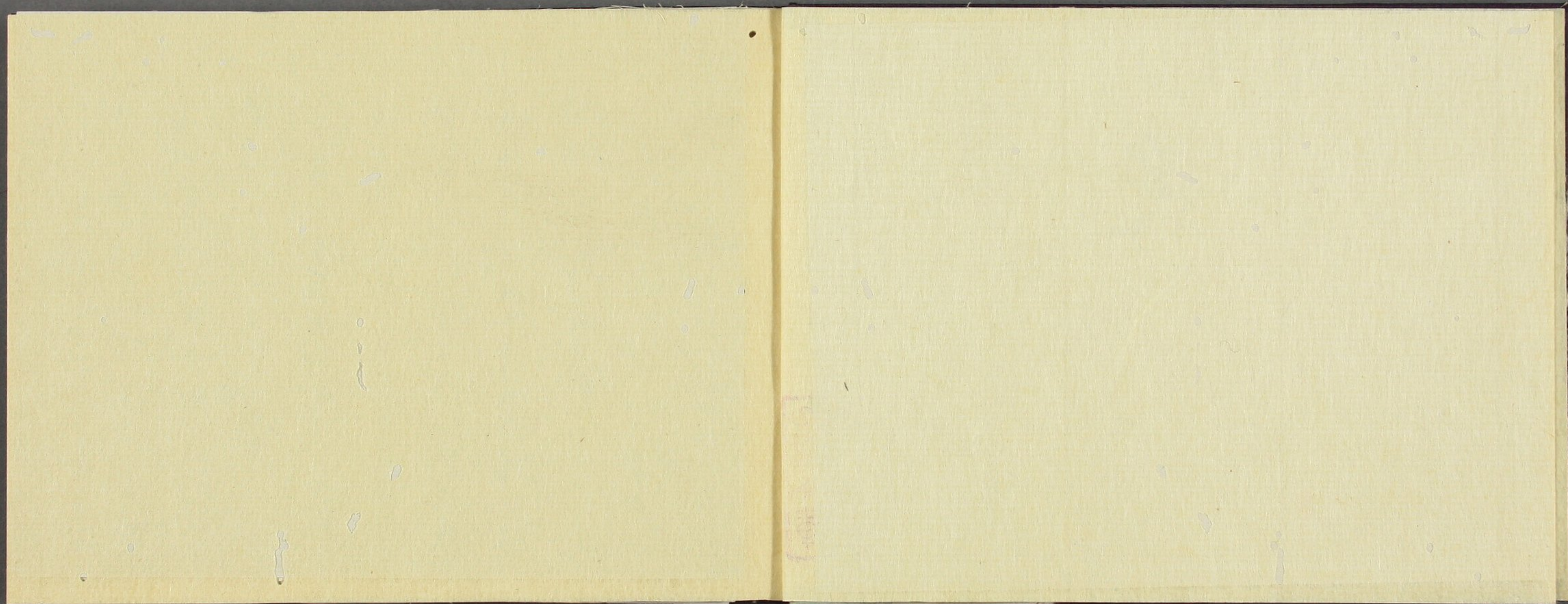


策





篝火

以詞并款為卷若

あけり火よまきふ志の煙こぼ
せよとくちあふれほる外連
けあきる煙をよけらるゝ篝火の
きりりいさふ煙とさうは
ひまふかり火のまをさき
うたをる煙——とみせ
—とけり火よふけとあ
け

源世六女秋乃始乃事
也

おねはをば人の——西下
あまもなうそ——まこしね
うらた大いもの 近江若の
事御まうて源氏乃御免
世上乃口遊よおのおう——
まこしね——よこは近江若
御引出まこと源氏其分別
うは内大長のおいふ不
定なるまうて 御乃御免也
よこは近江若のあまし

よるしのさ

万事をるーかーしん

よーたあーくわんわんわん

とや

ゆるよーけんも ちんちん

とやけにまのさくらん

まててむらーし海女の

仕事はあーいんくわん

ちんちんや

さうしんしんさうさう

いあーいんしんさうさう

ちんちんさうさうや

さうさう

よるしのさーしんちん

よるしのさーしんちん

ちんちんさうさうさう

花胡さうさうーさうさう

とーしんちんさうさう

ちんちん

よるしのさ

和歌や

五古のしほりつゝよ

萩のよもも 面白き神也

前の調よさふれすく

とつれや夜よ入能也

もしやうらむ物人萩乃

まゝいあはれちる能る

一

かゝきんきん 養ほはりの

也まゝわけくくもふ

一あゝいあうつちる

きんきんあゝいあけい

也まゝいあうつちる

ハ非也

いさうおさむい

ううあゝいあけい

右近のよふ

心匠梅監乃叙爵一

いさうあゝい

かゝ水のあゝ

水色よ焼るいあけい

かたはなむすのたへく
さつるはたかあまをたてん
くまらるる

うら松 うら松といふ

子燈松也きく母うら

入くすな故うら松也

うら也

うらむらむらむら

玉のうらむらむら

うらうらく うらうら

思始源氏乃ら也

きくは人きあうら

源氏乃下知一始也

友乃月さ記行と

秋中よりうらぬと記行の

月ちうらと記とさる面白

友乃中も涼くは秋

峰の中も涼暑あはれ友

の心あはれ也

惣一ては友のさ也友乃

夕やに花経いともやれし
おもほしうたれに庭の
に火くそよぐれと物別
乃うまきことのねみら
くまよや

つらゆふよきとらそふ
篝火のこ我胸の烟を
うらうらいさる也花の
篝火のほる朝あま
我下りえに世よとまぬ

いほかりしとやあつあつ
夜をぬ宿よあまの
いさき我身下もえびん
杵の音如何争乃人の未言
意也こぬえ打出たれも
外園蹴まかりおつとや
はあはしとくふもあま
ぬ急の烟もくも下
もあまとらるよや
あまの玉うらな

り急るはしうし

善火は煙の立の如く
きねるおやうはしうし
煙のしはり急る如く
早しうしおんを也
乃由にひけるにみえ
すも也

くもわたり 中
云朝也 園云くわや
ひんりのさ 花しら

中乃其の夕音は朋友

取中乃其 柏木は笛

とまうしあはれ也

善徳乃人也

又さても少なるなま

別してと吹するはと也

さうとらに成也 拙雅の

三位妙音院乃器を

さうして中乃其乃しん

こゝろやうしよひんぶあり
にふれもいなり

まらつたけし三人

夕音の中 柏木の中 弁

サねあはあ也

色ねえと 峰よりなりけり

楚思渺茫雲水冷 高

聲清脆管絃秋 白

秋の烟子ひ吹くころ

まのさねてらん

西よといきしそ 和琴也

さうしき 舞子 浮世也

源中ねい け服きしそ

源中ねと申ん 源中ねより

まれある 故さうし

源中ねおつしり

御しそしきしに 歌世の事

ちまうし 柏木にまらうし乃

西方ちねをいけきりす

ちまうし

弁せね 紅袖也 見取中ね
乃とくらにやまふ中ね
うさし出さる也

こ急すむし

短歌の鏡に不及也こ急
よと書るれいさる也
あしは中ねな 相本中ね
ちおし 内大臣也和琴
のよふたのいさる
みよおしな 浮世中ね

玉のいさるこね
こねの音律をいさる
こね人あんと也玉の
乃まおるいさる
よもおるさる
急いさる乃つあけ

解ね也

よまふらむこねも酒の
解るれすらな解るあやも
急いさる乃つあけこね

はかばかしくもせしむる

さねにもさかしくもせしむる

てふもけしむる可なり

4. しとふの中におもひ

のまゝにわいせしむる

知界を引けるからる

てふまゝにわいせしむる

てふまゝにわいせしむる

おさしむる可なり

おさしむる可なり

とあはれり 昔司馬相如

の巻を引く卓文君の心

をわいせしむる

相如

もあはれり

相如昔桃文君得直使原

申子細聴

司馬相如、文君を挑す

と作らる詩也昔の朝よ

みまのうらみのあはれ

しんがくしんがく
しんがくしんがく
しんがくしんがく
しんがくしんがく

